学校の後輩がいつの間にかダメ人間になっていた件

タン塩レモンティー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一色と初詣に行った八幡は、彼女の一面を見ることとなる。全二話。

目　次

学校の後輩がいつの間にかダメ人間になっていた件　～その１～　1
学校の後輩がいつの間にかダメ人間になっていた件　～その２～　9

学校の後輩がいつの間にかダメ人間になっていた件
～その1～

最近、心なしか一色から送られてくるメッセージが多い。まぁ、流れで教えてしまったのが運の尽きだったが。そして、俺が煩わしいと感じないくらいの絶妙なバランスが保たれている。もし狙ってやっているのだとしたら、一色は既に俺の性格や好みを把握しているということであり、中々侮れない。

あざとさどこ行った。……いや、むしろあざといのか。

俺は一色から送られてきたメッセージを改めて確認してみる。そこには、毛布に包まれて、幸せそうな笑顔を浮かべている一色の画像が添付されていた。

全くもって、あざとい女である。

他にも、時々送ってくる少し過激な自撮りも問題だ。流出したりすれば後悔することになるからやめろと言っているのに……

いくら俺が鉄の精神を持っているといっても、所詮は人の身である以上限界があり、最近は少々煩悩が溢れ始めている。

そんな煩悩を少しでも祓うため、俺は初詣に来ていた。残念ながら除夜の鐘をもってしても煩悩を完全に祓うことはできないようだが、聴いていると何故か清らかな気持ちになるので、それなりに効果はあると思っている。

◇

「先輩、お待たせしました！」

一色が小走りで駆け寄ってくる。普段制服なのであまり目立たないが、一色の胸は意外に豊かに見えるので、そこそこ注目を集めていた。

「一色、わざわざ走らなくても俺は逃げないぞ」

「はぁ、はぁ……、で、でも、先輩のこと待たせちゃってましたし、なるべく急がなくちゃって……」

待ち合わせの時間は２３時３０分だったので確かに遅刻ではある

のだが、5分程度なら誤差の範囲と言える。
イメージとは違って律儀な一色らしいのだが、結果として俺は周囲の男達から敵意を向けられることとなったため、少し複雑な気持ちになった。
「俺もさっき着いたばかりだから。まずは深呼吸しろ」
「は、はい……」
ラジオ体操のようなモーションで深呼吸を始める一色に少し笑いそうになったが、ギリギリ無表情を保つことができた。
最近、どうにも表情が緩みやすくなっている気がしてならない。原因は間違いなく一色だと思うのだが、正直それを認めるのも癪で仕方がなかった。
「ふぅ、あの、ところでお米ちゃんはまだ来てないですか？」
「小町は遅れるってさ」
そう言って、スマホのやり取りを見せる。一色は口角を上げたような気がしたが、気のせいだろう。
「でも、それだと、わたしと先輩二人きりってことになっちゃいますけど、いいんですか？」
「仕方ないだろう」
ぶっきらぼうに言い返す。去年は偶然出会った川崎一家と初詣をした。俺に気を遣ってくれたが、本当はしたくなどなかっただろう。大志はどうでもいいが、けーちゃんが喜んでくれたのはまぁよかった。だから今年も一応誘いはしたが、無理に来るなと念は押しておいた（余計なお世話だったが）。
「……それは、喜んでいいのか」
一色が複雑な顔で呟くが、俺の反応を求めているワケじゃなさそうなのでスルーしておく。
「いえ、これはチャンスと思うべきですよね！」
「何がチャンスかわからんが、変な期待はするなよ」
一色に好意を向けられているのはわかるが、俺にはどうにも恋愛感情ではない気がしている。どちらかというと、兄を慕うような感覚というか……

「期待はしちゃいますよ！　だって、初めてのデートですよ!?」
「デートではないだろう。これは初詣だ」
「初詣デートです！」
「……そうか」
　まあ、世間的に見ればそうなのかもしれない。しかし、俺の目的はあくまで煩悩を祓うことなので、実際は真逆の状況と言えるだろう。ただ、それを一色に言ってしまうのは野暮かもしれないので、ここは空気を読んでおく。
「じゃあ一色、はぐれないよう手を繋ごうか」
「え、ええっ!?」
「ああ、ほら」
　俺が手を差し出すと、一色は恐る恐るといった感じで手を乗せてくる。
「それじゃあ、行くぞ」
「は、はい」
　乗せられた一色の手を軽く握り直し、階段を上っていく。その間一色は完全に無言だったが、気まずいという感じにはならなかった。一色がどう感じているのかはわからないが、俺は悪戯が成功した子どものような気分になっている。
　ただ、少しからかい過ぎだとは思うので、ある程度落ち着いたら手は解放してやろうと思った。
「あっ」
　階段を上ってすぐのところで甘酒を配っていたので、一色の手を引いて巫女さんに近づいたのだが……
「アンタ達……、そういう関係だったの……？」
　その巫女は、なんと川崎だった。彼女はやや剣呑な雰囲気を発しているが、文字通り不安の意味合いが強いように思える。完全に誤解なのだが、どうしたものか。
　一番いいのは繋いだ手を放して深い意味は無いと説明すればいいのだが、このタイミングでそれをすると一色が凹む可能性がある。それに加え、川崎を意識していると勘違いされる恐れもあるので得策で

はない気がする。
　ということで、俺は一色と手を繋いだまま誤解を解くプランを選択した。
「誤解だ。これは人混みではぐれないように手を繋いだだけで、深い意味は無い」
「……アンタがそう言うならそうなんだろうけど、その子は違うでしょ」
　川崎にそう言われ、一色は顔を真っ赤にして俯いてしまう。いつもの一色だったら「そうでーす♪」とか言って堂々としているのだろうが、一体どうした？
「あまりからかってやるな。それより、川崎こそこんなところで何しているんだ？」
「あたしは……、言ったでしょ、バイトよ」
　確かにそう言っていたが、まさか巫女のバイトだとは思わなかった。
「全く……、なんでよりによってここに来るのよ。去年はアンタの家の近くの神社だったでしょ」
「今年は目的があったのでな」
　川崎の言う通り、去年は家の近くにある神社で年を越したのだが、今年は除夜の鐘を直接聴くという目的があったので寺を選んだ。
「だったら最初から言いなさいよ！　聞いてれば、絶対に来させなかったのに……」
「何故だ？」
「何故って、こんな格好見せたくないからに決まってるでしょ!?」
　どうせ川崎は来ないと思っていたので、どこに初詣に行くかは伝えていなかった。その結果、川崎は去年と同じ所と思い油断したらしい。
「かなり似合っているぞ」
　巫女服は和装の一種なので、引き締まった体つきの川崎とは相性がよく、非常に見映えがいい。川崎の髪型は銀髪のロングのため大和撫子というイメージはないが、これはこれで和洋折衷となり魅力を増し

ているように思える。
「そ、そ、そんなワケないでしょ!?」
「そんなワケある。なあ一色？」
「え、あ、はい。川崎先輩、とっても綺麗です……」
一色にまで褒められたことにより感情が処理しきれなくなったのか、川崎は半ば強引に甘酒を押し付けると足早に立ち去ってしまった。
「そんなに恥ずかしがることでもないと思うけど」
「先輩！　人によって感じ方なんてそれぞれです！」
「……、確かにそうだな」
人の悩みを聞いて「そんなの大したことない」とか「その程度で」とか言ってしまう人間は多いが、一色の言うように人によって感じ方はそれぞれ異なるのだから自分をベースに考えるのはご法度である。
本人にそのつもりがなくても、結果的に人を傷つけることにもなりかねないため、注意が必要だ。
「……まあでも、川崎先輩は先輩に似合っているって言ってもらえて、嬉しかったと思いますよ？」
「それならいいんだがな」
俺は過去、川崎をその気にさせてキレられたことがある。今回は一色にも意見を求めたので大丈夫だろうが、あとで小言を言われるくらいはあるかもしれない。
「さて、甘酒も貰ったことだし、端の方で鐘の音を聴くとしよう」
「あ、はい！」
あと２０分ほどだが、人混みを離れて鐘の音にじっくり聴き入りたかった。
◇
「除夜の鐘の音って、なんだか落ち着きますよね」
「そうだな」
俺はそれだけ言って会話を切り上げ、あとは黙ったまま鐘の音に意識を傾ける。一色には気まずい思いをさせてしまっているかもしれないが、今は煩悩を祓うのに集中したい。

しばらくそうしていると、一定の間隔で鳴らされていた鐘の音が止んだ。
「今のが、最後の一回だったみたいですね」
除夜の鐘は寺ごとに鳴らすタイミングや期間などが異なるが、この寺は比較的ポピュラーなタイプで大晦日に１０７回鳴らし、１０８回目は年を越してから鳴らす。
今のが最後の一回ということは、年が明けたということだ。あちらこちらから歓声が響き渡り、花火も上がる。
「あけましておめでとうございます！　先輩！」
「あけましておめでとう。一色」
一色は空になった紙コップで口を隠すようにしながら、嬉しそうに笑っている。一体何がそんなに嬉しかったのか……
「なんでそんなに楽しそうなんだ？」
「だって、新年早々先輩にご挨拶できたんですよ？」
「いや、それの何が楽しいんだ？」
「わかってないですね先輩！　わたしは今、先輩が今年になって一番最初に挨拶をした人物になったんですよ!?　それはつまり、先輩の今年一番になれたってことなんです！このわたしが！」
「お、おう」
確かにそうなのだが、そんなに力説するような内容なのか……？俺の主観では大したこととは思えないが、一色にしては珍しく語気が強いので何か重要なポイントなのかもしれない。
「それと同時に、先輩がわたしの今年初めての相手になったんです！だから、責任とってください！」
「……えぇ」
そう言って一色は、衝突するような勢いで俺に抱きついてくる。場合によっては後ろに倒れてもおかしくない威力である。
「おい……、流石に今のは驚い……っ！」
「うへへ～♪」
俺の胸に頬擦りしながら幸せそうな笑顔を浮かべている一色。
その普段とは違う大胆さと、先ほどの謎の言動から、一つの答えが

浮かんでくる。
「一色、お前……、酔っているな？」
「え～？　酔ってなんかいませんよ～？」
　完全に酔っているヤツの返事であった。原因は間違いなくさっき飲み干した甘酒だろうが、まさかそれで酔うとは……
「せんぱ～い、なんだか疲れて、足に力が入りませ～ん」
「だから、それは酔ってるからだ」
「違いますよ～、えへへ～♪」
　今のは別に喜ぶポイントでもなんでもないのだが、一色は嬉しそうに顔を摺り寄せてくる。それと同時に押し付けられた双丘が、腹の辺りでこねくり回され、複雑にカタチを変えていた。
（いかん……）
　先程祓ったハズの煩悩が、再び俺の中で目覚めようとしていた。煩悩を完全に祓うことは不可能とされているが、まさかこんなにも早く復活してくるとは……これでは、何ために除夜の鐘を聴きに来たのかわからなくなってしまう。
　俺は意識的に一色の胸から視線を外すことで、迫りくる煩悩を遠ざける。幸い？　感触についてはコートの厚い生地越しなのであまり感じない。視覚情報がなければ邪な気持ちも込み上げてこないだろう。
「せんぱ～い♪」
　……否だ。圧倒的質量の前では、たとえコートの厚い生地でも感触は消せても柔らかな雰囲気までは消しきれない。それに加えて、一色の甘い声が聴覚まで刺激してくるため、一気に限界が近づいてくる。
　酔っ払いの相手は同性に任せるのがセオリーなのだが、今は小町も川崎もいない。川崎は探せばいるかもしれないが、バイト中のアイツに頼っていいものか……
　このままでは社会的にもマズイことになりかねないため、せめて休める場所くらい提供してもらいたい。
　川崎を探して視線を彷徨わせると、意外にもすぐに発見することができた。というか、男達に絡まれていた。

「一色、少し離れてくれ」
「いやです～！　離れませ～ん！」
　この大きな子どもをどうするべきか……。ん？　そうか！
「おい一色、もし離れてくれて、ついでにここで少し大人しくしていてくれれば、ご褒美をやるぞ」
「えっ!?　ご褒美ですか!?」
「ああ。だから離してくれ」
「はい！」
　どうやら俺の作戦は上手くいったようだ。つか、チョロくないか。
「よしよし良い子だ。それじゃあ、ちょっとの間ここでじっとしててくれ」
「わかりました！　えへへ～、ご褒美ぃ～♪」
　幸せそうに笑っている一色を一旦放置し、一秒でも早く川崎の元へ向かう。

学校の後輩がいつの間にかダメ人間になっていた件
～その２～

「いいじゃんＬ○ＮＥ交換するくらいさ～！　折角の新年なんだし？」
「なんであたしがアンタ達に個人情報渡すのさ！」
「そりゃ仲良くなるためでしょ。ｗｉｎｗｉｎ的な？」
　川崎に触れようと伸ばされた手を、寸でのところで掴んで制止する。
「やめておけ、怪我をすることになるぞ」
「ああ？　なんだよお前？」
「俺はこの巫女の知り合いだ。悪いことは言わないから手を引け」
　と言っても、この手の輩が簡単に退くとは思えない。少し怖いが、俺は残りの二人を目で牽制する。
「てめぇ、喧嘩売ってんのか？」
「いや、違う。文字通り、あのまま手を出していたらお前は怪我をしていた」
「どういう意味だよ」
「この巫女は柔道の有段者だ。それも全国区の。もし触れてたら、今頃投げ飛ばされていたぞ？」
　俺の言葉に、男三人はわかりやすく反応を示した。一人は身構え、一人は身を退き、俺に腕を掴まれた男は明らかに動揺している。
　てっきり俺の言葉を疑うものと思っていたが、意外にもあっさりと信じてくれたようだ。恐らくだが、川崎の整ったスタイルから何かスポーツをやっているだろうということくらいは予測していたのかもしれない。
「い、いやいや、女の子が男を投げ飛ばすなんてできるワケが……」
「あたしは無差別級にも出たことがあるから、アンタよりも体のデカい女子を投げたことだってあるけど」
「……マジで？」

「こんなことで嘘ついてもしょうがないでしょ」
いや、ハッタリとしてなら意味はあると思うがな。まさか、普通の女子の口から無差別級なんて言葉が飛び出すとは思わないだろう。
「……あ～っと、お兄さん？　この手を放してくれない？」
「もう手を出さないなら、解放しても構わない」
「お前は何様なんだよ！」
男が、掴まれた腕とは逆の手で殴ってこようとする。その時、あまりにもタイミングよくサイレンの音が聞こえて止まった、ような気がした。
「おい！　行くぞ！」
男が急に動き出し、別の男を呼びつける。
「お、俺達はもう行くんで、手を放してやってくれませんか!?」
肩を貸した男の顔がかなり緊張した様子だったので、俺は何も言わず手を放してやった。
「え？　いや、ちょっ」
肩を貸した男は一発蹴りを入れてそれを黙らせると、強引に引っ張って距離を取った。
「馬鹿野郎！　パトカーのサイレン音だ！」
「え？　お、おう……」
男二人は、そそくさとこの場を去っていった。ちなみに、もう一人いた男は揉め事の気配を感じ取ったのか、とっくに逃げている。ああいうのが生き残りやすいタイプなのかもしれない。
振り返ると小町が立っていてスマホの画面を見せながら、ピースしてた。見ると、不審者対応アプリで、サイレン音もそれだったらしい。俺には向けないでくれよください。
「大丈夫か？」
「この流れで普通に会話始めようとしないで！　……とりあえず、助かったわ」
「気にするな。困ったときはお互い様というヤツだ」
川崎は何か言いたそうな顔をしていたが、結局何も言い返してこなかった。であれば、今度こそこちらの案件を聞いてもらおう。

「それで、恩を着せるようで悪いが、こっちも今少し困った状況でな。一つ確認したいんだが、この辺で休憩できる場所あるか？」
「休憩って……、なに？　あの子を連れ込む気なの？」
　川崎が赤面している。おい、ナニ考えてる。
「川崎は何か勘違いしているぞ。俺が言っているのは文字通りの休憩できる場所だ。実は一色が酔っ払ってな」
　川崎も半分冗談のつもりだったのだとは思うが、自分で振っておいて顔を赤くするくらいなら最初から言わないで欲しい。
「酔っ払ったって、まさか酒飲ませたの？」
「いや、さっき渡された甘酒で酔ったらしい」
「え？」
「残念ながら」
　川崎は少し呆れつつも、そういうことであればと寺の離れにある小屋に案内してくれた。なんでもバイト用の着替え場所兼、休憩室として提供されているらしい。住職には川崎の方で話をつけてくれるそうだ。
「無理を言ってすまなかったな」
「……別にいいよ。それより、本当にここでおっぱじめたりはしないでよ」
「安心しろ。そのくらいのリスク管理は出来る」
　何の保証もないが、手を出さない自信はある。
「出されなきゃ出されないで惨めな気持ちになるんだからね？」
　と言われても、聞いてしまったからにはそう簡単には忘れられない。女はそういうものなのだろうか。
「よくわからんが、わかった。それで、一色を送っていく件だが……」
「……あと1時間くらいで上がりだから、それまで大人しく待ってて」
　川崎はそう告げると、俺の返事も聞かずに出て行ってしまった。やはり機嫌を損ねてしまったのかもしれない。一体どう反応すれば正解だったのかはわからないが、考えたところで答えは見つからないので意識を切り替えることにした。
「せ～ん～ぱ～い～！　ごほうび～！」

とりあえず、まずはこの大きな子どもの対処について考えることにしよう。
「せんぱ～い、早くご褒美～！」
一色は蕩けた表情でうわ言のように「ご褒美～」と繰り返しながらゴロゴロと畳の上を転がっている。
完全に幼児化しているようだ。
「一色、こんな所でゴロゴロすると服が汚れるぞ」
古くなった畳は表面がボロボロになり、衣服にゴミが付きやすい。というか、既にボロボロと畳カスが衣服のアチコチについてしまっている。
「言わんこっちゃない……」
俺は一色を座らせ、服に付いたゴミを払っていく。本当に子どもの面倒を見ているようだ……
「せんぱ～い、体じゃなくて頭を撫でてくださ～い」
一色は撫でられてると勘違いしたのか、自分の頭を差し出してくる。
「別に撫でてるつもりはなかったんだがな……」
俺は一色の整った髪の毛が乱れないよう、なるべく優しく頭を撫でてやる。一色はしばらくの間に蕩けた表情で頭を撫でられていたが、急に口をすぼめ不満そうな顔になる。
「先輩、これだけじゃご褒美になりません！」
「……じゃあ何をすればいい？」
「膝枕してください！」
一瞬何を要求してくるか警戒したが、聞いてみれば大したことない内容で少しホッとする。
「そのくらいなら全然構わないぞ」
「わーい♪」
脚を正し膝をポンポンと叩くと、一色は嬉しそうに声を上げて膝に頭を乗せてくる。
「せんぱ～い、頭を撫でるのも続けてくださ～い！」
「ああ」

これくらいで満足してくれるのであれば安いものなので、言われるがままに要求に応えてやる。いつまでこうしているつもりかという点は少し気になるが、まあ30分くらいすれば流石に飽きるだろう。
（しかし、この状態を川崎に見られるのは少々気まずいな……）
今のこの状態は、誰がどう見ても恋人同士のようにしか見えないだろう。事情を知っている川崎であっても、誤解する可能性は十分にある。川崎がどれくらいに戻ってくるかは不明だが、10分ほどで切り上げた方が良いかもしれない。
「なあ一色――、おいっ!?」
「先輩のにおいー♪」
時間制限を告げようとした瞬間、一色が頭の向きを変えうつ伏せ状態になる。そしてその状態で深呼吸でもしたのか、下半身にじんわりとした温かさが広がる。
何とも言えない怖気が背中を走る。股間のニオイを嗅がれるという極めて変態的なシチュエーションに加え、ダイレクトな刺激が色々マズイ。というか、股間を嗅いで人のニオイというのは酷くないか？
「待たせたわね――って!?」
そして、おおよそ考え得る限り最悪のタイミングで川崎が戻ってくる。川崎の目には、股間に顔を埋めている一色の頭を俺が押さえつけているように見えたことだろう。
「ア、アンタらナニしてるのよ!!」
そう叫ぶと同時に、履いていたであろうスニーカーが飛んでくる。俺はそれをなんとか片手で受け止めることに成功した。てか千葉の球団、キャッチャー育ってくれよ。
「川崎、誤解だ」
「それのどこが誤解だって言うのよ！」
「本当なんだ。おい一色、起き上がって誤解を解いてくれ」
寝ている……だと……？この状況で寝るとか、どういう神経をしているんだ？実は酔ってなどおらず、俺のことを困らせようとしてるとしか思えなくなってきたぞ……
「川崎、本当に誤解なんだ。近付いて確認してくれ」

「なっ……!? ナニを確認させる気!?」
「いや、だから無実だということを確認してくれ」
「そう言って、見せつけようとしてるとか……」
「俺にそんな趣味はない！」
　俺の言葉を信用した……というワケではなく、単純に落ち着きを取り戻したらしい川崎は、恐る恐るといった感じで近付いてくる。
「……寝てるの？」
「みたいだ」
「この子、アンタの股間の匂いを嗅ぎながらどんな夢を見てるのかしら」
「……想像したくもない」
◇
「一色を背負って帰ること自体は構わないが、無断で家の場所を知ってしまうのは問題あるんじゃないか？」
「別に、この子は気にしないでしょ。それに、知ったところでアンタは何もしないんだから問題ないじゃない」
「まあ何もするつもりはないが」
　恐らく川崎の言うように、一色は自宅の場所を知られても気にはしないだろう。しかし、それはそれとしてやはり無断というのは少し抵抗がある。なんとなくモヤモヤするので、あとで自己申告するとしよう。
「……ねえ」
「なんだ？」
　しばらく無言で歩いていると、川崎の方から声をかけてきた。
「アンタ的には、どうなの？」
「どう、と言われてもな。俺の勘違いでなければ好意は持たれていると思うが、正直判断できない」
　これは嘘偽りない俺の本心だ。一色については正直色々心を揺さぶられている自覚があるが、それが幸せにつながるのかはわからない。若気の至りかもしれない。
「……ややこしく考えすぎでしょ。アンタらしいっちゃらしいけど」

「川崎的にはどう思う？　アイツは本気だと思うか？」
「その子は間違いなく本気でしょ」
「どうして断定できる？　一色はあざといけど憎めない妹みたいな存在だとは思う。けど、アイツは依頼をきっかけに接していくうちに、謎の信頼感が生まれた結果それを恋愛感情と勘違いしている……と俺は予測している」
「だからややこしく考え過ぎだってば！　勘違いだろうがなんだろうが、今の本気には変わらないでしょ!?」
「それはまあ、そうか……」
　その人のためを思ってと意見を挟むのは少々おこがましいかもしれない。
「全く……。それに、一番大事なのはアンタの気持ちでしょ？　二人がどうのじゃなくて、アンタがどう思ってるかって話」
「……俺は一色のことも悪くないと思っているし、川崎に対しても、大体同程度の好意を抱いている」
「……って、は!?」
　深夜の住宅街に、川崎から出たとは思えないほどの大声が響き渡った。
「おい、近所迷惑だぞ」
「ア、アンタが変なこと言うからでしょ!?」
「別に変なことは言っていないぞ」
「と、とりあえず確認するけど、アンタの言う好意っていうのはアレよね？　友達としてってことよね？」
「そうだが？」
　川崎が顔を真っ赤にして固まっていた。息をするのも忘れていたのか、少し呼吸を乱している。走っても滅多に息を乱さない川崎にしては珍しい光景だ。やはり慣れないことはしないに限る。
「安心しろ。一色は俺が手を出さないことをわかったうえで遊んでいるだけだ。それぐらいはわかる」
「でも、この子はなかなかヤヴァイんじゃない？　さっきとか股間に頭突っ込んでたし……」

「その話はやめてやれ。恐らく本人が一番ショックを受けている」
「いや、流石に本人が聞いている前ではやめておくけど……」
「もう遅い……」
俺は川崎の肩に手を置く。いつの間にか、一色の幸せそうな寝息が聞こえなくなっていた。俺の言葉に反応してピクピクと動いていたし、まず間違いなく――狸寝入りである。